12 月第 4 週の礼拝説教

■日　時：2023 年 12 月２４日（日）10：30～11：30　クリスマス
■説　教： 保科けい子牧師
■説教題：「あけぼのの光 」
■聖　書　新約：ルカによる福音書 1 章 67～80 節（新約 p102）
■讃美歌：261「 もろびとこぞりて 」
　　271「 喜びはむねに 満ちあふれる、」
　　67「 貴きイェスよ 愛の主よ、

今年のクリスマスは、3 年ぶりでコロナ禍以前に近いお祝いができることになりました。昨年は行わなかったイブの燭火礼拝もマスク着用ですが復活します。そして、何よりも本日の礼拝には、大きな喜びが主なる神様からのプレゼントとして与えられたと確信しています。

昨年のクリスマス説教でもお話ししたと思いますが、私はクリスマス礼拝を迎える度に、私自身が洗礼を受けた頃のことを思い出します。1970 年 12 月 20 日（日曜日）がクリスマス礼拝でした。今年で受洗後 53 年目を迎えることができました。今でも、その時の準備会で教えていただいたことが思い浮かんできます。その最初の時に「洗礼を受けるということは、自分自身の心の中心に新たに玉座を設けて主イエス・キリストをお迎えすることです。」と教えていただきました。「よくよく自分自身を掘り下げてみると、私たちの心の中心に誰が座っているかが見えてきますよ。」と準備会を担当してくださった母教会の副牧師は語られました。後になって、心の中心とは私たちが主なる神様と対話をする「魂」と呼ばれるものであることに気づきました。副牧師はさらに、私たちが主イエス・キリストを心の玉座にお迎えしたら、私たちの祈りの対象は主イエス・キリストの父なる神様以外にはないことを強く語られました。そういうわけで、必ず「主イエス・キリスト」の名前を通して祈るのは、私たちの心の奥深くに主イエス・キリストが共にいて弱い私たちを助けてくださるからだ、と教えてくださいました。また、クリスマスの時期によく読まれるルカによる福音書の 1 章 46 節から 55 節に、「マリアの賛歌」と呼ばれる美しい詩文が記されていることも語られました。「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます」と歌い出されています。原文は「あがめ」という言葉で始まっており、それがラテン語では「マグニフィカート（マニフィカート)」という言葉なので、この「マリアの賛歌」は「マグニフィカート（マニフィカート」とも呼ばれています。では、「あがめ」の主語は誰かと言えば、「わたしの魂」です。そして、あがめる対象は「主」であり、喜びたたえる対象も「救い主である神」です。私がそのような学びをし、美しい賛歌に初めて出会い、クリスマスに洗礼を

授けていただいたのは、とても幸いなことでした。なぜなら、私の魂に主イエス・キリストが宿ってくださったという思いが特に強く感じられ、後に、ヨハネによる福音書1章14節の「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。」を深く学ぶことにもつながっていったからです。

ところで、本日の聖書箇所は、「ザカリアの預言」という見出しがついていますが、「ザカリアの賛歌」とも呼ばれています。この箇所もまた、冒頭の「ほめたたえよ」のラテン語である「ベネディクトゥス」という呼び方で親しまれています。先ほどお話しした受洗準備会で、ルカによる福音書には三つの賛歌があり、マリアの賛歌「マグニフィカート（マニフィカート)」、ザカリアの賛歌「ベネディクトゥス」、そして、シメオンの賛歌「ヌンク・ディミティス」と呼ばれていることも教えていただきました。自分自身の知識が素晴らしくなったような気がして、高揚した気分でクリスマスを迎え、洗礼を受けたように思います。しかし、三つの賛歌が歌っている内容などについてはほとんどわかりませんでした。

そのなかで、本日はザカリアの賛歌（今、私たちが礼拝で用いている新共同訳聖書では「ザカリアの預言」になっています。）をご一緒に読んでいます。エルサレム神殿の祭司であり神に仕える身でありながら、神様の御言葉を信じて受け入れることができなかったザカリアが、口が利けなくなったという出来事から、その賛歌の出てくる背景が説明されています。ザカリアは、たとえ主の天使の言葉であっても、「恐れることはない。ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリサベトは男の子を産む。その子をヨハネと名付けなさい。その子はあなたにとって喜びとなり、楽しみとなる。多くの人もその誕生を喜ぶ。」という内容を受け入れることができなかったのです。年老いた妻と自分の間に子供が与えられるがはずがない、とごく常識的な判断をしたのです。けれども、そのことによって口がきけなくされた結果、ひたすら沈黙して神様の御言葉に耳を傾けていく機会を与えられたのでしょう。その沈黙の時を経て男の子が生まれ、ザカリアとエリサベト夫妻は、その子を主の天使の語った通り「ヨハネ」と名付けました。すると、ザカリアは再び口が開き言葉を語れるようになったのです。聖霊に満たされたその第一声が「ほめたたえよ、主を」でした。

ザカリアの預言の中心は、わが子ヨハネが「主の民に罪の赦しによる救いを知らせる」ということ、その罪の赦しをご自身の十字架の死と復活によって成し遂げ与えて下さる救い主イエス・キリストが来られる道備えをする、ということでした。そして、その救いとは、78節に「これは我らの神の憐れみの心による。」とあるように、旧約聖書の時代から語り継がれている主なる神様の憐れみに満ちた契約が実現することであると歌っています。

ですから、「この憐れみによって、高い所からあけぼのの光が我らを訪れ、79 暗闇と死の陰に座している者たちを照らし、我らの歩みを平和の道に導く。」という預言は、あけぼのの光として来られる主イエス・キリストによる救いが、この世界の暗闇と死の陰に座している人々を照らしてくださり、私たちすべての者の歩みを平和の道に導いてくださる、というものであることを明らかにしているのです。この御言葉を読むときに、「今、世界中で起こっている悲惨な戦いに苦しむ多くの人々が暗闇と死の陰に座しています。それらの人々に光が差し込むという救いがもたらされるように。」という私たちの祈りにも現実味が見えてきます。今年のクリスマスこそ、私たち自身が主なる神様の憐れみによって主イエス・キリストの救いを本当に知ることができるように、また世界中の暗闇と死の陰に座している人々に、一日も早くあけぼのの光である主なるイエス・キリストの救いがもたらされるようにと、共に祈りましょう。